読む力と読書についての考察

～自ら本に手を伸ばす子を育てるために～

中西　正子

読書を楽しむ子にしたい。これまで私はどの学年を担任しても読み聞かせを大切にしてきた。読み聞かせを通してそこに描かれる人物の喜び・悲しみ・驚きなどを追体験したり，ユーモア・笑いをクラスで共有したりすることで子どもたちが自ら本に手を伸ばすきっかけをつくってこられたように思う。しかし，自ら本を選択し，継続して読書を楽しむようにするには，文章を正確に読む，深く読む，自分の考えを持ちながら読む力をつけることが必要である。だから，授業で読む方法を習得させ，それが教科書以外の「読み」でも生かされるものでなくてはならない。そこで，「読みの方法を学ぶ活動」と「学んだ読みの方法を生かす活動」を組み入れた単元構想を考えた。

キーワード：読書，読む力，読みの方法を学ぶ活動，学んだ読みの方法を生かす活動

１．１年生の子どもと「読むこと」

１．１．本との出会い

１年生の子どもは，自分で声に出して本が読めたときや黙読して内容が理解できたとき，とてもよい表情を見せる。就学前に文字・ことば・本にふれ合ってきた機会によって差はあるものの，読めたときの感動はどの子からも伝わってきた。文字・ことば・本に新鮮なまなざしを向けるこの時期に大切してきたのは，次の３つである。

① 多くの読み物にふれ合わせること
② 質の高い本に出会わせること
③ 自分の読みと友達の読みを交流しながら，認識を深めさせること（読み深め）

①については，４月から「毎日読書」をさせてきた。読書習慣をつけることをねらいとし，「１日１ページでもよいので必ず家で本を開こう。」と呼びかけて始めた。漫画以外ならどんな本でもよい。本を選ぶのは子ども自身だ。

中川李枝子の本を読み，読書記録をつける子ども

読書記録が１枚２枚と増えていくことは子どもの励みになっている。基本的には家で取り組むことにしているが，朝の読書タイムや授業の中で読書の時間をとったときは，「『毎日読書』に書きたい。」という声が多い。

読書記録に一言感想を書くために，話をおおまかにとらえ一文にまとめる指導をした。そして，一文でまとめた一言感想を学級通信に掲載し，読んだ本を交流するようにしてきた。

②については，読み聞かせやブックトークを中心に行った。どの本を選ぶかは，本校の図書館司書に相談したり，研修会で情報を集めたり，教科書との関連を考えたりし慎重に行った。その際に最も重要なのは，目の前にいる子どもの実態をふまえ，毎日関わっている担任自身が「これぞ！」と思うものを提示することだ。季節にあったもの・科学読み物などもバランスよく取り入れた。

いったん担任の手から離れると，学級集団の中でその本が息づいていくことがよくある。一人が本を手に取り夢中で読み出すと，瞬く間に次の順番が決まっていくのだ。

学校行事と本も切り離せない。その一つの例として学校図書館活性化事業で本物の狂言を見る機会があった。事前に公演予定演目の狂言絵本を読み聞かせていた。公演後，他の演目にはどんなのがあるのだろうと興味を持った子たちは，図書室で狂言絵本を手にとって読むようになった。そして，今も子どもたちの中に狂言絵本ブームは続いている。また，大阪フィルハーモニーの生の演奏を見た後は，『オーケストラの１０５人』が子どもたちの心をとらえた。正装をしてきちんと舞台に並んでいるオーケストラのメンバーたち。あの人たちは一人ひとりどんな人なのか，どんなふうに

支度をして舞台に集まってくるのか，その秘密をのぞかせてくれる傑作な本である。これは，手にとって挿絵をじっくり見ながら読むことに適しているので，演奏の翌日にブックトークをして紹介した。

また，作者や画家とのつながりも大切にしてきた。一度出会った作者との２度目の出会いでは，「〇〇の本を書いた人と同じだ。」と気づく子どもがいて，それが他の子どもにも刺激になる。絵を見ただけで「教科書に出てきた『はなのみち』の絵を描いた人と同じ」だと気づく子もいる。絵や写真の善し悪しについても十分に吟味して紹介するべきである。特に昔話などは絵の違い，言い回しの違いによって読み手が受ける印象は大きく変わってくる。改訂版が出されたが，改訂前の方が感性に合っているということもある。１冊読んだ後にもう１冊提示し，子どもに判断をゆだねるのも時にはおもしろい。

１．２．読み深め

③については，『くじらぐも』の実践を中心に述べたい。本単元では，声に出して楽しく読むことをねらいとした。楽しく読むためには，いくつかの条件が必要になると考えている。「場面の様子や登場人物の気持ちが想像できること」「自分の読みを聞いてもらい，満足感が得られること」の２つである。この２つが達成できるような「読みの方法を学ぶ活動」を考えた。

そして，「学んだ読みの方法を生かす活動」としていつもお世話になっている先生方を招いて，学習発表をすることを考えた。

２．声に出して楽しく読もう『くじらぐも』

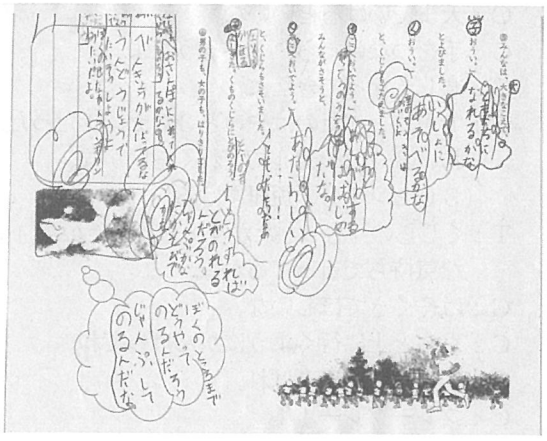
①読みの方法を学ぶ活動

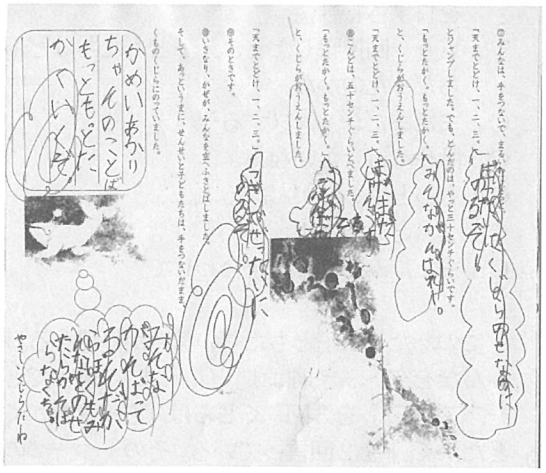
物語との出会いの段階で，実際に運動場に出て空を見上げ雲をながめたり，挿絵を見ながらくり返し音読したりすることをたっぷりと行いたいと考えた。

そして，一人読みノート（本文の行間を広くとった本文と挿絵が入った小冊子）をもたせ，書きこみをしていく。登場人物に寄り添い，なりきり読みすることをねらって，会話文に言葉を付け足すことを中心にした。授業の中で，自分の思いをもって音読し，ペアと聞き合うようにしていく。その際，どんな思いで読みたいかを先にペアに伝え，読み終えた後互いに評価するようにした。

一人読みノートには，学習のふり返りとくじらぐも日記を書く欄がある。学習のふり返りには友達の意見を聞いて「なるほど！！」と思ったことを書く。くじらぐも日記には，その場面でのくじらぐもの思いをまとめて書く。話し合いを通して，一人読みでは気づかなかった新たな視点が加わって書けることを願い指導してきた。

一人読みをする子ども





一人読みノート

②学んだ読みの方法を生かす活動

空に帰って行ったくじらぐもが，そのあと友達に会ったように設定し，友達に今日の出来事をどんなふうに話したかを想像して書くようにした。一時間ごとに書いてきたくじらぐも日記を生かし，友達に語りかけるように思いを書いていく。

毎時間取り組んできた音読と書いたくじらぐものお話をグループに分かれて，先生方に聞いてもらうことにした。

３．単元の実際

３．１．思考の停滞

３の場面。くじらのところに行こうと張り切る子どもたちとそれを一生懸命応援するくじらの気持ちの高まりを読みとらせたかった。

Ｔ：手をつないでまるいわになった子どもたちは，どんな気持ちで「天までとどけ，一，二，三。」って言っているかな。
Ｃ：はやくいきたいな。
Ｃ：はやく，くじらにのりたいな。
Ｃ：天までいけるといいな。
Ｃ：手をつないだら，とべそうだよ。
Ｃ：楽しくなってきたよ。
Ｔ：でも，とべたのはやっと３０センチだったんだよね。３０センチってどれくらいかな。
（３０センチ分の短冊をはる）
Ｔ：くじらの「もっとたかく，もっとたかく。」はどんな気持ちで言ってるかな。
Ｃ：はやくきてほしいな。
Ｃ：もっと上に行くようにがんばってね。
Ｃ：がんばれ。がんばれ。
Ｃ：フレーフレー！！
Ｃ：力を合わせてフレーフレー。
（ここで乗ってきた子どもたちはフレーフレーの歌を口ずさむ。）
Ｔ：もう一回挑戦したとき，子どもたちはどんな気持ちだったのかな。
Ｃ：まだまだジャンプするぞ。
Ｃ：はやく行きたいなあ。
Ｃ：もっともっとがんばるよ。
Ｃ：こんどこそ！！
Ｃ：また，みんなで力を合わせて。

このあたりで子どもたちの勢いが停滞する。「かぜがみんなを空へふき飛ばす」ところまで「天までとどけ，一，二，三。」を３回。くじらは「もっとたかく，もっとたかく。」を２回言っている。その一つ一つの言葉を追っていこうとしたのが授業の流れも子どもの思考も止めてしまった。子どもを型に入れて引っ張ろうとしすぎたように思う。

それで，気持ちの高まりを視覚化しようと文字をだんだんに大きくした５つの言葉の短冊を黒板にはった。子どもたちの集中はまたここでいったん持ち直したが，やはり強引な展開をしてしまったので，気持ちをのせて音読することができなかったように思う。

その次時の授業で，前時のふりかえりの音読をするときに，もう一度短冊を張ってみた。今度は臨場感をもって楽しく役割読みができた。

３．２．言葉にこだわって読む楽しさを

くじらのところに行こうと張り切る子どもたちとそれを一生懸命応援するくじらの気持ちの高まりを読みとらせるには，もっと言葉にこだわらせるべきだったと思う。

例えば，「天までとどけ，一，二，三。」の「天」ということばだ。

「天まで行ったらくじらをこしちゃうよ。」と一人読みで書きこんでいた子どもがいたが，「『くじらまでとどけ，一，二，三。』じゃだめだったのかな。」と発問することで，くじらをこえてまだおつりがくるぐらいうんと高いところまで行けそうな気がする，行ってみたいという気持ちを感じ取れたであろう。そうすると，手をつないで，まるいわになった意味も見えてくる。

また，「子どもたちは，はりきりました。」ではなく「みんなは，はりきりました。」でもなく「男の子も，女の子も，はりきりました。」と表現されていることからも張り切り度合い，気持ちが高まっていく兆しが読みとれる。

さらに，「でも，とんだのは、やっと３０センチぐらいです。」のところ。「でも」からは，きっとくじらのところまでいけると信じきっていた子どもたちの思いが伝わってくる。けれども，天まで行くのはそう簡単でないことが「やっと」にふくまれ，そこへくじらからの「もっとたかく，もっとたかく。」という応援の声。「きっと来れるよ」とくじらが子どもたちを励ます様子が見えてくる。

続いて，「こんどは、５０センチぐらいとべました。」のところ。「こんどは」に対して「さっきは３０センチぐらいだったけれど」が隠れていることに気づかせることで，くじらの応援が子どもたちにしっかり届き，さらに思いを強くしたことを想像できる。

音読を楽しませるために，一人読みでは会話文に着目させてきたが，このように，むしろ地の文にこそ登場人物の気持ちを読み取るかぎがあるということを教え気づかせていくべきだった。それが「読みの方法を学ぶ活動」だと考える。

３．３．言葉にこだわった結果

５の場面。書きこみをしたことを発表していく中で，予想していなかった発言が飛び出した。「おや，もうおひるだ。」せんせいがうでどけいを見て，おどろくと，「では，かえろう。」と，くじらは，まわれ右をしました。のところだ。

Ｃ１：くじらは体育で習ったことをやっていると思います。
Ｔ　：なぜ，そう思ったのかな。
Ｃ２：はじめの場面で「『まわれ，右。』せんせいがごうれいをかけると，くじらも，空でまわれ右をしました。」ってあったから。

Ｃ３：まねをしたのが楽しくて，覚えているから。

Ｃ１の子どもの１の場面とつなげる発言があったことで，そこから２・３・４の場面でのくじらの様子をふり返る発言へと続いていった。まねをしたところが印象に残っている子どもが多かったのは，１の場面の学習で「も」にこだわったことにあると考える。

「一、二、三、四。」くじらも、たいそうをはじめました。のびたりちぢんだりして、しんこきゅうもしました。・・・（以下３回続く）

まねをしました。とは書いていないけれど，助詞「も」によって運動場にいる子どもたちの動きを空のくじらがまねている様子を想像することができた。

５の場面の前半で，１・２・３・４の場面の楽しかった様子をふり返ることができたので，「１ねん２くみの子どもたちの『さようなら』のあとにどんなことばが続くかな」という発問に対して，「さみしいなあ。」と実感をこめていう子や「また，ぜったいにきてね。」「また，ちがう勉強のときも来てね。」「ずっと友達だよ。」「今日のこと６年生になってもわすれないよ。」「またほかのクラスのところへもいってあげてね。」などと自分たちで思いを重ねていく子どもの姿が見られた。

４．単元の考察

１年生という発達段階において，どうすれば対象との対話が深まるのかということに悩み，自分の中に迷いがあったことが大きく授業に影響した。話し合いの前に一人読みをさせ，一人読みノートに各自書きこんでいったが，子どもたちは書くことで満足し，そこから他者との対話につなげていくところで勢いがおちてしまった。端的に言うと，教材文に対する鮮度が落ちて退屈してしまったのだ。これは，書いたことが話し合いの中でどうつながっていくのかという見通しや，わくわく感をもたせられなかったことが最大の原因であると思う。

魅力を感じる発問を投げかけ，子どもたち一人ひとりが教材文に立ちもどって夢中で考えるということの積み上げが，対話を成立させるために１年生には特に必要ではないかと考える。

協議会で「子ども同士の関わりがもっとあればよい。」というご指摘をいただいた。これは，言いかえれば対話が成立していなかったということであろう。まずは，すべての学習活動において聞き合う関係づくりを強化していくこと。その上で，どの子にもよく分かり，単元を通して学習意欲が持続する課題を設定すること。そのために，一時間一時間の中でいかに教師が子どもの学びをみとり，支援していくか，あらためてその大切さを感じた。

５．成果と課題

子どもたちが同じ土俵に立って新鮮な気持ちで話し合いができるようにするために，今後授業の中で次のようなことを追究していきたい。

① どんな発問をすれば子どもたちの思いがひろがっていくのか。（発問の工夫）
② 一人読みの段階でつまずいている子にどう支援するか。どのタイミングで。どんなふうに。（みとりと支援）
③ ペア学習をどこで入れていくか。（協同的な学び）

また単元計画においては，子どもに何を学び取らせるかを見極めて「読みの方法を学ぶ活動」を考え，身に付いているかどうかを見取っていく指針になるような「学んだ読みの方法を生かす活動」を組み入れたい。

自分の読みと友達の読みを交流しながら，認識を深めさせることについては，課題を残しているが，自ら本に手を伸ばし，楽しんで読むことが習慣づいてきたのは大きな成果である。

> 毎日読書をするようになってから，私は本が大好きになりました。幼稚園のとき買ってもらったけれど自分で読めなかった絵本を今は読めてうれしいです。
> 図書館でもかります。好きな絵本はルルとララのシリーズとバーバーパパのシリーズです。

２学期終業式の日，連絡帳を書いていたときのこと。学級通信に宿題を載せているので，宿題の欄に「毎日読書」と書かなかった。そうすると「先生，毎日読書って宿題に書いてないよ。」「忘れているよ，先生。」という声があがった。

本に向かう子どもたちのきらきらしたまなざしがくもらないように，今後も読み深める力がつく授業研究と「おもしろくてうきうきする本」の水先案内人を続けていきたい。

参考文献

・『小学校国語「読むこと」の指導[低学年]～一人一人に確かな「読む力」つけるために～』阿部 昇 白石範孝 高木まさき 共編　光村図書
・「これからの時代に求められる国語力について」　文化審議会答申（2004年2月）
・『現在（いま），子どもたちが求めているもの―子どもの成長と物語―』斉藤惇夫　キッズメイト
・『オーケストラの105人』カーラ・カスキン作 マーク・サイモント絵 岩谷時子訳 すえもりブックス